

## アーネスト・バージェス博士論文における社会化研究<sup>1)</sup>

——シンボリック・インタラクショニズムの祖型として  
社会的世界論を読みこむ——

鎌 田 大 資\*

Socialization Studies in Ernest Burgess' Doctoral Dissertation: A Possible Source of  
the Symbolic Interactionist Perspective of Social Worlds.

Daisuke KAMADA

アーネスト・バージェスはその80年の生涯において、数多くの学問的パートナーとともに、いくつもの研究分野や調査スタイルに先鞭をつけた開拓者である。ところが、もともと人口に膾炙した1920年代のロバート・パークとの協同研究において、年長のパートナーだったパークを補佐する役回りを引きうけたためか、パークの名声の影にかくれ、バージェスの業績は未解明なままにとどまっている。論者はバージェスに関する二次文献の網羅的な整理につづき、この数年、彼の学問活動の最初期に位置する博士論文『社会進化における社会化の機能』（Burgess 1916）<sup>2)</sup>の読解に取り組んでいる。そして、シカゴ・モノグラフと呼ばれる古典的な社会調査報告書群をはじめ、各種の社会調査の先駆的かつ独創的な指導者となったバージェスが、19世紀に発祥して間もない社会学の先行研究者から何を引きつぎ、どのような方針を確立したのかという疑問を念頭に、博士論文執筆時点の初期学説を解明しようと努めている<sup>3)</sup>。その過程で、20世紀の前半の代表的な社会学の教科書の一冊である『科学としての社会学入門』（Park & Burgess [1921] 1924）をパークと共著した際に、どのような学問的前提を受け入れたかなどの論点も、明らかにできると信じている。

本論では、バージェスの博士論文の第3部に注目する。そして博士論文全体の概要と照合し、彼がこの時点で構想していた社会進歩の概念を浮き彫りにする。同時に、専門知を活用して社会貢献を志す専門職の設立と、その側面的支援という彼が学問的生涯を通じて打ちこんだ事業を意識しつつ、大学院生時代にバージェスに指導を受け、シンボリック・インタラクショニズム（symbolic interactionism. 以下、SIと略す）の有力な理論家となったアンセルム・ストラウスが枠組化した社会的世界論の、萌芽的なアイデアをこの博士論文に読みこみ、SI理論史への小規模な修正を提案する。

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

## 1, バージェス博士論文の概要

バージェスは1916年に公刊された博士論文で「社会化」という概念を、英国史を事例に一般的に位置づけ直した。その際、「社会化」の語を同時代の社会主義者（Lenin 1975; Cole 1930）がもちいる意味（「国による私有財産の接収, 共有化」<sup>4)</sup>）から引きはなしつつ、1930年代以降、文化人類学（「文化とパーソナリティ」学派）でもちいられはじめる「社会で共有された価値を、個人が成長の過程で取得し内面化する」という意味に近づけていった（Burton et al. 1968; Dollard [1935] 1949; 鎌田2016, 2016a）。「文化とパーソナリティ学派」の「社会化」概念は、現在、社会学、教育学、心理学などで広くもちいられている。

それ以前、19世紀のアメリカ社会学の巨匠たちは、それぞれに独自の意味合いで「社会化」という概念を使用している。そのうち、ギディングズの『社会化の理論』では、最初に社会学の文献で「社会化」概念を導入したのはジンメルの「社会学の諸問題」だと述べ、ジンメルの「社会化」は集団形成、また人々の交際の形式の発達を指すが、自分は交際する個人の社会的性質、または性格の発達についての概念として構想すると述べた（Giddings 1897: 1-2, 1901）<sup>5)</sup>。バージェスの博士論文ではそれらを批判的に検討し、相互に対立する部分を整理しながら、社会学の営みに利用可能な形に精練しようとしている。

バージェスの著名な同僚のパークとの協同関係についても振りかえっておく（鎌田・中野2003: 33-34）。パークはシカゴ大学着任と博士論文出版の年に、研究プログラムとして「都市」（“The City”）という論文を *AJS* (*American Journal of Sociology*) に発表し、のちのシカゴ・モノグラフの社会調査の路線を方向づける視点を提示した（Park 1916; Lannoy 2004）。バージェスは前任のチャールズ・ヘンダースンの授業を引きつぐ際の参考にするため、スコット・ベドフォードという都市社会学の教師に、シラバスを提供してもらうよう依頼したところ拒否された。そこで、新任のパークとともに教科書を作成することになり、5年ほどを費やして執筆、編集したのが、装丁の色から *Green Bible* とも言われる『科学としての社会学入門』である（Park & Burgess [1921] 1924）。

この教科書は、学部長のアルビオン・スモールの書簡の文面などから推察すると以下のような経緯で執筆されたと思われる（Bogue 1974: xiv-xv; Matthews 1977: 130-131）。パークとバージェスの打ち合わせを経て、本体としての社会学に関連する著作の抜粋の選定と、各章の序文の執筆を主にバージェスの手でひとまず終えたあと、パークの構想から全体が見なおされ、いくらかはパークの手で書きなおされた。ただし、論調としてパークの発想から書かれたとは思えない部分が随所に残っており、それはバージェスによるものと論者は推定している。特に本論と関連づけて読むべきなのは巻末に置かれた14章「進歩（Progress）」（Park & Burgess [1921] 1924: 953-1011）である。ここには社会的事実を数量的に測定することを通じて知識の蓄積を促し、社会の進歩の方向づけを図ろうとする視点が語られている。こうした考え方は、プラグマティズムに基づく社会改革の方向性を示すものと特徴づけてよいだろう。そして、パークやハーバート・ブルーマーの社会科学の数量化に対するペシミズムを考えると、やはりそれはバージェスに特有の思想傾向の表れのように思われる<sup>6)</sup>。

そしてこの傾向を、バージェスの生涯を通じて取りくんだ専門知識の蓄積を活用する専門職の立ちあげという学問的事業と対応させつつ考えると、1940年代にバージェスの指

導を受けたストラウスの社会的世界論の枠組みの原型が、そこに見いだせるのではないかと論者は推測する<sup>7)</sup>。そしてここで論者は、SI理論史のうち、特にバージェスからストラウスに引きつがれたものに注目している。

バージェスの博士論文は、第1部で社会進化における発明の役割を考察し、第2部で有史以来の英国史を通観し、社会主義的な労働者の団結を通じた労災保険、年金制度、社会保障の仕組みを備え、現在、福祉国家と呼ばれる体制が整備される局面に至るまでを論述し、第3部、理論編で全体の締めくくりとしている。章立ては表1として掲載する。

今回は、上記のうち、特に第3部の「ひとの社会化 (personal socialization)」について概観し、そこに盛りこまれた考察を、バージェスの生涯の歩み、および現代に至るSIの主要概念と関連づけて再解釈する。

バージェスの博士論文冒頭の社会化概念の定義は、以下に見るようにたいへん茫洋として幅広く、あいまいな表現となっている。

集団 (group) の視点からは、集合での活動 (collective activities) への個体 (individual) の心の分節化 (psychic articulation) と、わたしたちは「[社会化]」を定義してもよい。個人 (person) の視点からは、集団の精神と目的、知識と方法、意志決定と行為に個体が参加することである。(2)

表1 『社会進化における社会化の機能』(Burgess 1916) の章立て<sup>8)</sup>

序 pp. 1-3.

第1部 発見と発明における社会化の役割 (5-67)

第1章 発見と発明 (7-8)

第2章 社会化の機能としての保存 (conservation) (9-20)

第3章 社会化の機能としての創出 (origination), その一, 社会的遺産 (21-37)

第4章 社会化の機能としての創出, その二, 社会組織 (39-51)

第5章 社会化の機能としての創出, その三, 社会的刺激と要求 (52-67)

第2部 社会の進歩における社会化の役割 (69-174)

第6章 社会の進歩 (71-74)

第7章 社会化の血族的段階 (75-86)

第8章 社会化の個人的段階, その一, 封建的タイプ (87-108)

第9章 社会化の個人的段階, その二, タウン・タイプ (109-136)

第10章 社会化の非個人的段階 (137-174)

第3部 ひとの発達における社会化の役割 (175-237)

第11章 ひとの発達 (177-181)

第12章 社会化の認知的側面 (182-202)

第13章 社会化の情動的 (Affective) 側面 (203-220)

第14章 社会化の意志的 (Volitional) 側面 (221-231)

第15章 結論 (232-237)

ただし、博士論文全体を通読すると、バージェスの主張はもう少し限定され、彼の社会進歩のビジョンが「社会化」という概念を通じて結晶化していくのが観察できる。

第3部は、知的、情動的、意志的な社会化という順番に分析を進めている。この分け方は、バージェス博士論文の11章に挙げられた参考文献から、当時、シカゴ大学で機能主義心理学を提唱したジェームズ・エンジェル（Angell [1904] 1908）に従っていると推定できる<sup>9)</sup>。

ここで特に20世紀初頭の心理学の機能主義を特徴づけるなら、ヴィルヘルム・ブント（Wilhelm Wundt）、エドワード・ティチェナー（Edward Titchener）らの構造主義とジョン・ワトソン（John Watson）の行動主義にはさまれて展開された考え方ということになる。エンジェルの『心理学』の冒頭部分では二人の教師としてウィリアム・ジェームズとジョン・デューイが挙げられている。デューイは、シカゴ大学創設当初に心理学を講じたが、実験学校の運営に関して大学当局と対立して転任した。本論では、デューイが「反射弓（reflex arc）」概念を表明した論文（Dewey 1896）に見られるように、エンジェルの考え方も、刺激と反応のあいだに生起する過程を自己や人格が発生するありかとして分析するものと捉えておく。「反射弓」論文は、G・H・ミードの社会心理学の展開にも大きな役割を果たしたとされる（Cook 1993）。エンジェルは、現在、哲学者と考えられているジェームズやデューイ同様、自己の内面を振りかえりつつ人間の心の働きについて考察する。内観法に依拠した学風であり、著作の目次も、まずブントやティチェナーの生理学的な研究を踏まえた考察のあとに、大まかに知、情、意という人間の精神活動の伝統的な哲学上の分類を踏まえて考察を進めている。感覚生理学を基礎とするエンジェルの哲学的議論は、ジグムント・フロイトの精神分析、尺度を構成した数量化、また、シカゴ大学の大学院で学び、ジョンズ・ホプキンス大学に赴任したワトソンの行動主義が勢力を増すまえにおこなわれていたもので、現在の心理学史で、常識的に回顧されることが多いこうした著者たちの考え方を含まないものである。

## 2. 第3部理論編の構成——「社会化」に関し言及される論者に着目して

まず、バージェス博士論文第3部を構成する12章から14章までを量的に概観する。すなわち、12章「社会化の認知的側面」が21ページ、13章「社会化の情動的側面」が18ページ、14章「社会化の意志的側面」が11ページとなっており、分量的にも12章の「認知的側面」に最も力が入っているように見える。また13章「情動的側面」は、バージェスと同時期にシカゴ大学に大学院生として在籍していたL・L・バーナードの、快楽と苦痛の計算から行動主義的に社会コントロールを捉えなおそうと提唱した博士論文「社会コントロールの客観的基準への移行」（Bernard 1910-1911）への、反論を提示することにページを費やし、14章「意志的側面」はスモール、ギディングズ、ロス、クーリーら、各大学の社会学部門を率いる代表的研究者の論旨の再確認に当てられている。先行研究者の論旨に批判的に言及しつつ、自説を組み立てるのはその後のバージェスの常套的な議論の進め方であり<sup>10)</sup>、それが研究経歴の最初期の博士論文にも確認できることになる。だからこそ、先行著作の批判的検討という中核をもたず、バージェス自身の博士論文の第1、2部の論旨を再構成して議論を進める12章「認知的側面」は、他の2章とは異質で著作全体の中核

的な位置を占められる。

以下、バージェスが援用する多様な著者から、どういう論旨を議論に組みこんでいくかを中心に各章の展開を概観する。

## 第11章 ひとの発達 (177-181)

エンジェルの援用して分析を3つに区分することを説明する。さらに英国史の事例を通して考察したことをアメリカ国内の文脈で論じるという方向性を提示する。

## 第12章 社会化の認知的側面 (182-202)

まず社会化の認知的側面の2つの機能を指摘する (184-192)。

1, 検証され、蓄積された知識の活用。この機能に関し、専門家 (experts) と一般大衆が乖離しているという指摘もある (Croly 1909: 138)<sup>11)</sup>。

2, 知識の伝播だけではなく、多くの社会の成員が過去の知識の蓄積に触れ、知識の新たな生産に参加することが重要である。知識の静的な (Static)<sup>12)</sup> 伝播を重視するレスター・ウォードと、チャールズ・エルウッドが対比される (Ellwood 1912)。社会的発明と社会改革による社会問題の解決のためには、社会成員の全員が議論に参加した創造が必要と、エルウッドは主張する。身近な経験こそ社会進化の誘引となる (Morley 1874)。

つづいて社会の潤滑油としてのコミュニケーションの重要性を指摘する (189-190)。オーギュスト・コント、J. S. ミル、ハーバート・スペンサー、ウォード、スモールらを対比的に援用して、社会的進歩のための社会的議論の重要性を論証する。

さらに、女性の権利獲得運動と労働運動により、社会的価値評価の新たな顔ぶれが現れたことを社会的議論の大きな変容と捉える (190-192)。こうした社会運動により社会的議論への参加者が実質的に増え、議論に導入される視点が多様化、進化する。

また教育、特に当時、話題になっていた産業教育についての議論を紹介する (192-194)。具体的にはミードらのソーシャル・サーベイ (Wreidt et al. 1912) などを引用している。それへの逆の立場として、公教育の普及に対する反論 (Crane 1909) も紹介するが、反トラスト法で産業界の大立者が陪審員として裁判に加わった普通の労働者に裁かれる様子を快挙として引用し、バージェス自身の立場を明らかにする。

最後に、当時の公立図書館制度の不備、新聞などの状況への批判的コメントを述べる (197)<sup>13)</sup>。

## 第13章 社会化の情動的 (Affective) 側面 (203-220)

L. L. バーナード (Bernard 1910-11) の、快苦による功利的計算にもとづく感情と社会的活動の関連づけ (行動主義) を批判的に引用する。

既出のエルウッドの議論、またクーリー『社会組織』 (Cooley 1910 = 1971) の子どもの第一次集団のなかでの成長についての議論を対比する。子どもの発達についての議論を小刻みに更新していたミードに関しては、産業教育のサーベイ (Wreidt et al. 1912) に書きこまれた文言に言及する。

社会進化について、ウィリアム・サムナー (Sumner 1906 = 1975) の、フォークウェイズ、モリーズの相互作用から人間社会の発展を論ずる立場を評価する<sup>14)</sup> (208)。



さらに宗教と芸術について考察する（215-220）。

#### 第14章 社会化の意志的（Volitional）側面（221-231）

人格が社会過程の最終産物とするスモール（Small 1910）と、完全な個人ではなく完全な社会こそが道徳的な理想とするフェリックス・アドラー（Adler 1910）<sup>15)</sup> が対比される（221-222）。カントがいうように個人は目的の王国なので、血の通った人間らしい福祉と幸福を求めるべきであるとする。ここでは孤立した個人ではなく社会関係を重視する姿勢を打ちだしている。

また社会コントロールについての諸論点を整理する（225）。ロスは、やや強制的なコントロールという面に力点を置きすぎである（Ross 1901）。社会心の達成が協同の目標とクーリーは考える（Cooley 1910 = 1971）。社会的感覚という場で、私生活はより広い範囲の人々の生活と交じりあうと、デューイは述べる（Dewey 1988）。バージェスの結論は、自発的な社会参加としての社会化を重視したいというものである<sup>16)</sup>。

#### 第15章 結論（232-237）

再び、ウォード、スモール、ジンメル、エルウッド、クーリーらの諸説を対照しつつ振りかえり、まとめている。

上記の第3部概要をふまえ、以下、12章のみに焦点を絞って考察する。

まずバージェスの博士論文全体を通じて読みとれる社会化の定義を整理すると、彼自身の表現に若干の編集を施した形で、「検証され、蓄積された知識の活用」を通じて進展する社会進化や進歩への参加と表現できる。女性や労働者を含めた幅広い社会階層の参加を確保することを含め、教育と専門知を蓄積し、社会的に活用する専門職の立ちあげと養成を構想する。ただし現在、一般に論じられているような専門職論の議論や知見は、当時、まだ存在していないので、現在の目から見てそれに近い論点だとする類推による読解にすぎない。しかしこの読み方により、バージェスの議論をSIの理論史に接合し、現代の社会現象に再適用、再活用することができる。その意味で、SI理論史の研究上、必要となる一解釈として特に論者はこの読解を提唱する<sup>17)</sup>。

12章から当時の思想状況を考察しつつ、バージェス独自の主張と思われるものを抽出する。デューイの実験学校の試みのように、教育はシカゴ大学で心理学を構築した哲学者たちの重要なテーマであり、教育学分野で検討されている著作も多い。そして、一般市民全体を対象とした公教育の有効な組織化という問題は、今さら再確認するまでもなく、デューイの民主主義論を支える構成要素になっている（Dewey 1915, 1916）。特に、シカゴ市の社会改革者たちが懸案として取りくみ、ミードが委員長となってシカゴのシティ・クラブで実施した公教育、職業教育に関するソーシャル・サーベイはその分野での典型的な調査例である（Wreidt et al. 1912; Mead 1999）。また12章では、社会的に蓄積される知識の生産に一般市民が参加しうよう、コミュニケーションを促す基盤としての公立図書館や新聞などの報道機関の役割なども、重要論点として考察されている<sup>18)</sup>。

他の論者の議論と照合するうえで重要と思われる上記の諸点を除き、バージェス独自の主張となっているのは、「検証され、蓄積された知識の活用」を手がける専門家に関する

議論である。本文中では、クローリーという著者の著作から知識を独占している専門家にサービスを受ける一般大衆が反感をもつなどの乖離現象を描く一節が引用されており、医療、法律、聖職者を原型とする専門職のあり方を歴史的、批判的に検討する現在の専門職論の議論の一部が先取りされている。これは、専門職に関する考察が、あまり進められていない時点でなされた先駆的な指摘といえよう。初期シカゴ学派を継承するSI論者では、従来、フリードソンの議論が代表的なものとして紹介されてきており、次節で検討する。

### 3. 2つの方向性

ここで巨視的文明論的方向規定として、サムナーの社会ダーウィニズムに対するスモールの、社会改革（social reform）を志向し、社会的にコントロールされたダーウィニズムの提唱について一言しておく。

この博士論文の冒頭に表明された社会進化論に関する枠組みとして、サムナーの自由放任的な考え方や、また偉大な発明が社会機構のなかで伝播していくことこそ社会の進歩の源泉であると考えたウォードの考え方があり、この両者をともに批判するスモールが、社会改革の視点から、社会的にコントロールを施しつつ社会進化を、よい方向に、意識的に促進する変形版ダーウィニズムを提唱して論争をおこなっていたという知的文脈がある（Christakes 1978; Bannister 1987: 47-63）。

もちろん、バージェスはシカゴ大学社会学部長であるスモールに加担しており、この立場のおかげで、バージェスはスムーズに博士号の審査をパスし、母校であるシカゴ大学に教員として赴任できたと思われる。

こうした文明史的展望は、シカゴ市を拠点とするセトルメント、ハル＝ハウスを通じて、デューイやフェビアンたちとも共有されていたもので、社会史的にはシカゴ市で推進され、シカゴ・モノグラフの調査の基金提供源ともなった社会改革運動の指導理念でもある。そしてこの視点は、フランツ・ボアズおよびその学生たちの手により、人類学において社会進化論を精鍊するかたちで形成された「社会化」概念にも連接される。すなわち、彼らによって各民族文化の価値観が青少年期に内面化される過程を観察するという方針が得られた（Mead [1928] 1961 = 1976; Kluckhorn 1939 など）。

こちらの社会的にコントロールされたダーウィニズムの文明史的、巨視的な観点は、社会学においても在世中のスモールが、さかんに主張した。ただし、後世の社会学者たちは、スモールが構想したようには、社会学という学問のために社会諸科学を統合して指導する女王という位置づけを保持できなかった。すなわち、自然科学、社会科学ともに生物学由来の量的研究技法に席捲され、富の生産に直接携わる経済学や、巨大産業と化していく製薬企業とも連携し精神医療分野の治療や診断の権限を確立した心理学に比べると、社会的な実用性に欠ける思弁的な学問に社会学がとどまっている現状に近づくにつれ、こうした社会学独自の文明史的構想は後景に退いていく。確かに、この論点はバージェス自身の博士論文の論旨把握のためには重要ではある。ただし、20、21世紀の社会動向を考慮した場合、実際にバージェスがスモールの志を一部でも実践するために、選択できたもっと重要な戦略が浮上してくる。

本論では、バージェスが博士論文第3部まで論じとおした段階で到達した「社会化」の

定義として、前節で抽出した「検証され、蓄積された知識の活用」による社会進化という視点を指定する。さらにクローリーの「専門家」に関する引用を敷衍し、その含意を、21世紀の社会景観から振りかえりつつバージェスの生涯や全業績と結びつける際、論者には専門知を確立したうえで、その知に拠る専門職を立ちあげる彼の活動が想起される。この点に関する尽力は、バージェスの学問的全生涯に観察されるライフワークといってもよい。

ここで、本論でSIの祖型と銘打つ対象について、一言、留保を加える。SIを代表するのはミードのプレイ段階、ゲーム段階などの子どもの社会化、他者の態度、役割取得についての社会心理学的洞察活とする見方は、学説史的にSI理論を取りあげて考察する際の常套である。クローリーからミードが引きついで展開した人間の社会的発達に関するこうした議論は、やはり重要といえるが、それだけでSIのエスノグラフィーが実質的に構成されることはない(Mead 1934 = 1973 / 1995)<sup>19)</sup>。むしろ多様な社会的現実を観察するうえで、人間同士の相互作用に注目し、該当の社会的領域での慣習化した相互作用のパターンについてのフィールドノーツを蓄積し、多様な事例を分析的に整理しながらエスノグラフィーを構成していく営みを、SIの中心的事業と論者は見る。その場合、より重要なのは社会的世界論の枠組みだろう (Strauss 1978, 1982, 1984)。

ミードやブルーマーの理論枠組みを受けいれつつ、多様な観察技法を駆使してエスノグラフィーを構成すること自体が、SI本流に位置づけられるというのが論者の信念である (Mead 1934 = 1973 / 1995; Blumer [1969] 1986 = 1991; Denzin 1992; Becker & McCall 1990)。SIのエスノグラフィーによる社会研究の源流は、シカゴ・モノグラフの諸作に発祥し、エヴェレット・ヒューズやその学生たちが展開した各種職業に関するエスノグラフィーに引きつがれ、そこからゴッフマンの視点のような相互作用に関する精緻かつ独特な知見も育成された (宝月・中野 1997; 中野・宝月 2003; Hughes [1971] 1984; Rose 1962)。さらにその応用として社会問題研究、レイベリング理論、社会構築主義が編みだされていく<sup>20)</sup> (Becker 1964)。そうした展開を経験し、ベッカーによる『芸術世界』<sup>21)</sup>論 (Becker [1982] 2008 = 2016) の枠組みが提示されたあとで、すべてを位置づける理論的大枠組み<sup>22)</sup>としてストラウスが提示したのが社会的世界論 (Strauss 1978, 1982, 1984) である。バージェスの博士論文に見られるその萌芽を、彼の専門職立ちあげプロジェクトを通して概観していく。

その「専門知に依拠した専門職の確立を通じての社会進歩」の実践の代表的なものは、a, 仮釈放の成否尺度を開発して犯罪学におけるアクチュアリーを立ちあげること (Burgess 1928) と、b, 結婚と婚約の幸福度尺度を開発して結婚カウンセリング (marriage counseling) に活用すること (Burgess & Cottrell [1939] 1998; Burgess & Locke [1945] 1953; Burgess & Wallin 1953) である。bの事業は、家族社会学の教科書『家族』執筆時の取りくみの中核をなしていたものであり、日本でも第二次世界大戦終結後の急激なアメリカ化の時期に、家族社会学者たちは懸命に移入しようとした (鎌田 2010)。バージェスの結婚と婚約の予測尺度は、本来、結婚カウンセリングの相談場面で使用されることを前提に開発された。結局、尺度としては主に家族社会学内部で活用されて終わったが、バージェス自身が編集した結婚カウンセリングの教科書も存在し、こうした専門職の立ちあげの意欲は、結婚カウンセリングや非行関連の業種にとどまらず、バージェス晩年の老年学の立ちあげプロジェクトでも観察できる (Fishbein & Burgess 1947; Burgess 1960 = 1975)。



バージェス自身の功績は、現在、主にパークとの共著『科学としての社会学入門』や『都市』(Park & Burgess [1921] 1924, [1925] 1984 = 1972) や、ハービー・ロックとの共著『家族』(Burgess & Locke [1945] 1953) によって記憶されている。しかし、とりわけ現実のアングロサクソン系の政治社会的、法的風土において最も強い影響力を及ぼしているのは、上記のa、仮釈放の予測尺度におけるアクチュアリー技法の応用である。バージェス存命中にはイリノイ州の刑務所に、バージェスの死後はアメリカの20以上の州に、社会学的なアクチュアリーが配備され、シカゴ大学の社会学の数多くの大学院生が着任した(Harcourt 2007)。彼らの多くはそれぞれに博士論文を著書として公刊している。そうした著作のなかでもロイド・オーリンのマニュアルには邦訳もあり、日本の少年非行への司法的対処の文脈でも参考にされたものと思われる(Ohlin 1951 = 1957)。

こうしたバージェスの取りくみを身近に見ていた大学院生の一人がストラウスであり、彼はグラウンディド理論を看護学部で展開するため、多数のマニュアル(Glaser & Strauss 1967 = 1996; Strauss & Corbin [1990] 1998 = [1999] 2004 など)を作成するなど、バージェス同様の専門職の立ちあげプロジェクトにかかわり、SIにおける社会変動論とも言える視点を社会的世界論として発表している。

#### 4. 専門職論と社会的世界論の展開を導入する

本節では、大まかに第二次世界大戦後のSIで展開された理論枠組や経験調査に関する業績のなかから、専門職論の展開と社会的世界論の誕生について概観し、上記のバージェス博士論文とのつながりを学説史的に辿りなおす。

a、いわゆる「専門職論」では、専門知の独占に基づく専門職の特権、権力の分析として批判的な観点から考察が進められた。ストラウスの社会的世界論について述べるまえに、より具体的に、SIの文脈でもっとも体系的にひとつの専門職について検討しつつけているフリードソンの、医療専門職研究と対比する(Freidson 1975, 1986, [1970] 1988, 2001, [1970] 2007 = 1992; 金子2012)。

医師という職業は、古代や中世には薬草を操るまじない師といった位置づけだったと思われる。19世紀には細菌学や麻酔技術の発展により大規模な外科手術の成功率向上などの進歩があり、現在の社会的威信を伴う専門職の地位を確立した。こうした歴史的過程をたどり、また現在、専門知識や技術を独占し、高度な社会的威信や収入を確保できる職種として君臨する状況において、インフォームド・コンセントやセカンド・オピニオンの活用といった事柄を通じて、少しでも患者中心の立場に近づく批判的見地から研究をおこなうのが、医療社会学における医師という専門職研究の一つのあり方だと思われる<sup>23)</sup>。

b、社会的世界論、またはその芸術領域における特殊事例としての芸術世界論については、過去に論者はいくつかの論考で取りあつかってきたので、ここで詳細の紹介には立ち回らない(Strauss 1978, 1982, 1984; Becker [1982] 2008 = 2016; 鎌田1990, 1991, 2014)。

ストラウスの社会的世界論は、その少しまえにまとめられたベッカーの芸術世界論と同様、まずある種の規範、美学、文化を共有していると見なされる人びとの世界を記述する枠組みとなり、社会的実践や技法、イデオロギーの周囲にそれらを共有する世界が形成さ

れ、また新奇な実践、技法、イデオロギーが編みだされることによりもとの集団が分節し、また状況に応じて、分派していたかつての共同体同士が再び合流、合同、合体するといった集団勢力の消長を分析する枠組みである。「社会的世界」論により社会過程 (social process) を記述、分析する作法は、社会学界の理論的流行に惑わされず、SIの簡潔、最小限かつゆるやかな概念装置のみに依拠して、調査対象となる社会集団内の文化や規範自体を記述し、そこから洞察を獲得する仕組みとして特徴づけられる<sup>24)</sup>。それは単純な視点だが、社会的活動に付随するイデオロギーや実践に着目し、その担い手のパースペクティブを分析することで、社会現象やその担い手に関する小規模な知識社会学的説明を試みつつ、社会の歴史的変動の一部を実証的に分析する技法といえる。

従来、医療、科学分野での取りくみが成果を挙げているが、ストロースの当初の構想では、政治、宗教、芸能などを含めたありとあらゆる社会的活動に適用できる (Fujimura 1996; Clarke 1998; 鎌田 2014: 34-35)。道徳企業家 (moral entrepreneur) の分析としてジョセフ・ガスフィールドの禁酒運動研究 (Gusfield [1963] 1986)、カイ・エリクソンの『偏屈ピューリタン』 (Ericson 1966 = 2014) などその事例と考えてよい。

最近では文書や図像資料に、グラウンディド理論的な分析を施す状況分析と呼ばれる技法も開発されている (Clarke 2005)。専門知の中核となるべき尺度構成技法の開発から、調査研究によるその実証例の提示、そして大学院生を指導し、彼らを調査の助手や共著者としてともに働きつつ、新たな専門職のよるべき中核的知識を形成し、その専門職の職域、職場自体を開拓して指導学生を送りこむなどの、バージェスによる活動は、専門職とその顧客からなる一つの世界を、ストラウスのいう社会的世界として創造する社会運動だと思われる。ストラウスの社会的世界論の原点とも考えられる専門職立ちあげの活動に向かう視点は、複雑、難解な印象を与える理論的表現を避けて、平易でわかりやすい構文で多数の著作を書きのこしたバージェスらしく、その学問的出発点といえる博士論文の結論近い部分に他の論者からの引用を媒介として書きのこされていた。その簡潔な考察、そして彼がその後の学問的人生の歩みで身をもって示した社会的活動を通して、グラウンディド理論をめぐる専門知の創出と、それに携わる看護やソーシャルワークの専門職活動の一領域の組織化という形で、バージェスと同様の経験を共有したストラウスは、彼自身の知的、社会的実践から獲得した社会学理論として、社会的世界論を形象化したと思われる。バージェスとストラウスを結びつけるこうした着想には、SI理論史に一貫した筋を通し、ミードからブルーマーへというすでに公認された路線に含まれないもう一つの路線を、浮かびあがらせる意義がある。そう考えると、あながち単なるこじ付けとして却下しざるわけにはいかない知的発見、アブダクション (鎌田 1998) として、バージェスやストラウスの知的業績、活動の重要性を見いだす機運を高めることだろう。

## まとめ

バージェス博士論文第3部「ひとの発達における社会化の役割」のうち、特に第12章「社会化の認知的側面」を再解釈することで、のちに社会学でも取りくまれる専門職論につながる着想がそこに書きこまれていることを発見できた。またそこからバージェス自身の各種専門職の立ちあげの活動を振りかえると、バージェスの指導学生だったストラウスが、

自分自身の看護社会学におけるグラウンディド理論の立ちあげをモデルとして、考察したと思われる社会的世界論の形成の際にも、その着想の源になったかと推測される。このようにバージェス博士論文を再解釈することで、SIの理論史上、ミード理論をブルーマーが再解釈して伝えたとする単純化された継承関係だけでは捉えつくせない多様な調査実践を根拠づけ、位置づけなおす有力な手がかりが得られる。

## 註

- 1) 本論は、2017年5月27日第68回関西社会学会大会での研究報告（理論・学説1，神戸学院大学）をベースに執筆した。活発に意見交換していただいた司会、発表者、フロアの方々に紙面をお借りして感謝を申し上げます。
- 2) 以下、本論ではこの著作についてページ数のみを括弧に入れて参照箇所を示す。
- 3) バージェスに関する二次文献のまとめ、またバージェスや彼に先行するシカゴ学派社会学者の業績については、鎌田・中野（2003-2005）、鎌田（2008, 2010, 2011, 2014, 2015, 2015a, 2016, 2016a, 2017）などを参照。
- 4) レーニンとは、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』の文言を踏まえて「社会化」という言葉の内容を政治綱領化したとされることがある（Marx & Engels [1948] 1959: 481 = 1960: 494; 副島 1964: 25-58）。その文言を一言の標語で言いかえるなら、エンゲルスが1947年に執筆し、『共産党宣言』の原型となった教理問答風の草稿「共産主義の原理」に見える「私的所有の廃止」（Engels [1914] 1959: 370-372 = 1960: 387-389）が、当てはまるようだ。その一方で、実際には、イギリスのフェビアンたちを含む社会主義者は、不労所得である地代（rent）を廃止するなどの綱領を立て、土地、資産、生産手段を「社会化」という表現を採用しており、その「社会化」の内容には工場などの職場を労働者が自主管理するという提言が含まれていた（遠山 1973）。イギリスの社会主義者は、鉱山町での生活扶助や団体交渉を通じてはぐくまれた労働運動で自らを教育した者や、メソディストの巡回説教者が労働運動のリーダーとなった者など多様な出自を含み、彼らのあいだにマルクスの著作は浸透しておらず、その文言を彼らが解釈しなおして「社会化」と呼んだとはいえないだろう（Bevir 2011; 鎌田 2016a）。そして「社会化」が「文化とパーソナリティ」学派により、現行の「児童発達の過程での文化規範の内面化」などの意味で使われるようになると、「私的所有の廃止」のほうの語義には、イギリスでもロシアでも、労働者の自主管理という面を取りのぞいた「国有化（nationalization）」という言葉が当てられるようになる（Tivey [1966] 1973 = 1980）。
- 5) ジンメルは『社会学』の冒頭「社会学の問題」で「社会化の形式」の学として社会学を定義し、二人関係と三人関係の違いをはじめ、多様な社会関係を考察している（Simmel 1908: 1-46 = 1994: 11-57）。「社会学の問題」は1894年にドイツ語単独論文として、1895年には英語版として発表された。さらに『社会学』刊行後にスモールも英訳を発表している（Simmel 1894, 1895, 1909）。この社会化（Vergesellschaftung）はギディングズのいう通り、集団形成を意味し、ジンメル自身による英訳段階からsocializationという訳語が当てられ、ギディングズ、スモールはその訳語を引きついでいる。したがって、このジンメルにおける社会化は、エンゲルスの「私的所有の廃止」とは異なる経緯で社会学界に投じられた語彙といえる。本論のベースになった関西社会学会の発表後の意見交換では、新睦人先生にジンメルの「社会化」は社会主義者の語義（私的所有の廃止）と、人類学者の語義（子どもの発達過程での集団の文化的価値の内面化）の中間にあたるものではないかご指摘いただいた。確かに社会主義系の「社会化」の語義に、ジンメル＝ギディングズ＝スモールの「社会化」が混用されることで、語義の自由度が

増し、バージェスが博士論文全体をもちいて達成しようとしている「社会化」概念の読みかえ、組みかえが可能になったと考えられる。ロスの『社会コントロール』（Ross 1901）やクーリーの『社会組織』（Cooley 1910 = 1971）の目次や索引では「社会化」という項目はない。またクーリーの発想を発展させたG. H. ミードの著作でも、子どもの発達という文脈では「社会化」という語はもちいられていない（Mead 1934 = 1973 / 1995）。

なお、本報告では著作権が終了した文献を参照する際、適宜、archive projectなどのインターネット上のデータを参照している。ネットにデータが掲載される各著作は、世界中どこかの図書館などで物理的に参照できることが前提である。ただし、その掲載アドレスは頻繁に変更されるので省略する。

- 6) ウィリアム・トマスとバージェスは文明の運命や社会改革に関して楽観的で、パークとブルーマーは悲観的だという特徴づけが、ベレニス・フィッシャーとストラウスによりなされている（Fisher & Strauss 1978）。
- 7) ストラウスはバージェスの指導を受け、結婚と婚約の幸福度の予測研究の一環としての調査に基づき博士論文を作成している（Strauss 1945, 1946）。
- 8) 各章訳題は、若干、前稿（鎌田 2016: 5-6）とは変更している。
- 9) エンジェル『心理学』（Angell [1904] 1908）の目次と構成は以下の通り。本注ではこの著作の各章タイトルの邦訳と（ ）内に該当ページ数を数字のみで示す。ただし、本書の9章までは基本概念を紹介する「序」であり、13章までが「知」を、19章までが「情」を、23章までが「意」を論じたものと論者は分類する。すなわち、「序」は、1. 心理学の問題と方法（1-12）、2. 精神生理学的有機体と神経系（13-58）、3. 精神、神経の行為、そして習慣（59-79）、4. 注意、弁別、そして連想（80-108）、5. 感覚作用（109-150）、6. 知覚（151-171）、7. 空間、時間的關係の知覚（172-195）、8. 想像力（196-221）、9. 記憶（222-244）、「知」は、10. 意味の意識と概念の形成（245-266）、11. 判断と理性作用の諸要素（267-278）、12. 推論の形式と機能（279-300）、13. 意識の情動的諸要素（301-315）、「情」は、14. 感覚と情動的意識の一般原理（316-333）、15. 反射的行為と本能（334-345）、16. 人間の重要な諸本能（346-362）、17. 衝動の性質（363-368）、18. 感情の性質（369-379）、19. 感情の一般理論（380-395）、「意」は20. 意欲の基本的特性（396-418）、21. 利害、努力、また欲望に対する意欲の關係（419-433）、22. 性格と意志（434-439）、23. 自己（440-457）の諸章から本書は構成される。
- 10) たとえば、『家族』1, 2版はウィラード・ウォラーが自身の主観的な結婚や離婚の経験から組みたてた結婚や婚約における幸福に関する考察に、尺度化を用いた社会意識調査により客観的に反論する形で全体が構成されている（Burgess & Locke [1945] 1953; Waller [1930] 1967）。
- 11) 次節で見るように、専門家の権力に関するこうした批判的観点は、SIの文脈においてエリオット・フリードソンらの医療専門職論へと引きつがれていくものの先駆である。ハーバート・クロウリーはリベラルな社会批判で影響力のあったジャーナリスト、社会思想家。
- 12) ウォードの社会動学(dynamics)と静学(statics)という対比に対応している（Ward [1883] 1968）。
- 13) 締めくくりに一般的考察とまとめも付されている（198-202）。
- 14) ここで、サムナーを「正当に」評価していることは、スモールの評価を受ける博士論文の一節において、一種の危険をとまなう行為であった。サムナーは社会ダーウィニストであり、経済社会の敗者と見なされがちな貧者は、適者生存の法則により淘汰されるべきかもしれないといった過酷な議論を書きのこしている。そうした論調に対し、バプティストの牧師でもあるスモールは敵対的な論陣を張った（Bannister 1987: 47-63）。しかしフォークウェイズとモリーズの二段階で社会規範を捉えるサムナーの説明法は、ベッカーの芸術世界論でも取りあげられ、あらゆる社会変動や組織の動態の説明原理となりうる考え方でもある（鎌田 1990; Becker [1982] 2008 = 2016）。これをバージェスが、博士論文の時点でスモールと敵対してしまうリス



- クを犯して正當に評価している点は、やはりサムナーを高く評価するパークとの共同作業をスミーズにしてくれた特徴だろうし、ベッカーやストラウスのSI理論の展開にも役にたったと思われる (Park 1931)。
- 15) この文献では、キリスト教教理を考察し、個々人の道徳的、宗教的完成を目指すのではなく、人間が生活する社会の完成を目指すほうがよいと宣言している。
- 16) ほかにHobhouse (1911), Ellis (1911) にも言及している。
- 17) バージェスはブルーマーのSI理論史の考察ではまともに論じられていない (Blumer 1937; 鎌田2006)。ただバージェス自身が立ちあげた家族社会学では、SIの視点から「相互作用する単位としての家族」についてのケーススタディを提示し、結婚や婚約についての尺度を構成した先駆者として言及される (鎌田2010)。それにとどまらず、SI自体および社会学における社会調査全体を形成し、専門職としての社会調査を立ちあげ、社会調査者の養成まで精力的に推進した英雄的な人物としてバージェスを見直すべきだと、論者は考えている。
- 18) 社会におけるコミュニケーションに関するこうした論点は、ジャーナリスト出身で群集論や人種関係論の専門家であったパークと、共同して取りくむ研究や教育活動の基盤となったと思われる (Park 1955)。
- 19) SIでは、ミードの業績は主に教育方面で活用されてきており、具体的なエスノグラフィーで意識して理論的に論じられるものではなかったと、フィッシャーとストラウスは述べた。しかしシカゴ学派社会学者たちは、ミードの社会進化、社会改革的側面にはまったく関心を払うことはなく、またミードの業績が教育的な側面で活用されてきただけでも言いがたいと、ブルーマーは反論した (Fisher & Strauss 1979; Blumer 1979)。
- 20) ベッカーが編集していた *Social Problems* 誌においてこうした研究動向のすべてが派生した。この雑誌創刊の際の巻頭論文もバージェスによるものである (Burgess 1953)。
- 21) 本論では、既存の邦訳書題にとらわれず、私訳による題目に置きかえて表記していることがある。
- 22) 論者はこの言葉で、映像編修技法におけるマスター・フレーム (master frame) をイメージしている。登場人物の表情を捉えるクロース・アップ、複数の登場人物の動きを伝えるミドル・ショットの応酬に至るまえに、その舞台となる地形、小道具、大道具類、人物の配置を伝えるための舞台全体を見渡す大きく引いたショットが提示されなければ、観客は人物たちと彼らの環境世界の位置関係が把握できない。
- 23) ストラウスも精神科医療や終末期医療の研究に携わりつつ、議論を展開した (Strauss et al. [1964] 1981; Glaser & Strauss 1965 = 1988 など)。また歴史社会学的に多数の専門職の位階秩序 (hierarchy) の変動を空き家理論 (vacancy theory) により説明したのはアンドリュー・アボットの『専門職の体系』 (Abbott 1988) である。
- 24) さらに、ストラウスの「交渉 (negotiation)」やその多様な文脈という分析枠組を導入することで、社会的、政治的に重要な意思決定の場面で、実際に観察できる当事者間の相互作用を分析、考察する視点が得られる。ストラウスの「交渉」概念は、SI理論が森羅万象といってもよい社会現象を取りあげ、分析する道具の重要部品の一つである (Strauss 1978a; 鎌田1991)。

## 参考文献

- Abbott, Andrew, 1988, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*, Chicago: University of Chicago Press.
- Adler, Felix, 1910, "The Moral Ideal," *International Journal of Ethics*, 20: 387–394.



- Angell, James Rowland, [1904] 1908, *Psychology: An Introductory Study of the Structure and Function of Human Consciousness*, 4th ed., New York: Henry Holt.
- Bannister, Robert C., 1987, *Sociology and Scientism: The American Quest for Objectivity, 1880-1940*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Becker, Howard S. (ed.), 1964, *The Other Side: Perspectives on Deviance*, New York: The Free Press of Glencoe.
- [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary ed., Berkeley: California University Press. (= 2016, 後藤将之訳, 『アート・ワールド』 慶應義塾大学出版会.)
- Becker, Howard S. and Michal M. McCall (eds.), 1990, *Symbolic Interaction and Cultural Studies*, Chicago: University of Chicago Press.
- Bernard, Luther Lee, 1910-1911, "The Transition to an Objective Standard of Social Control." *American Journal of Sociology*, 16: 171-212, 309-341, 519-537.
- Bevir, Mark, 2011, *The Making of British Socialism*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Blumer, Herbert, 1937, "Social Psychology," Emerson P. Schmidt, ed., *Man and Society: A Substantive Introduction to the Social Sciences*, New York: Prentice-Hall, 144-98.
- [1969] 1986. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Berkeley: University of California Press. (= 1991, 後藤将之訳, 『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法』 勁草書房.)
- 1979, "Comments on "George Herbert Mead and the Chicago Tradition of Sociology", " *Symbolic Interaction*, 2(2): 21-22.
- Bogue, Donald J., 1974, "Introduction," Donald J. Bogue, ed., *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Chicago: Community and Family Study Center, University of Chicago, ix-xxv.
- Burgess, Ernest W., 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press.
- (with Clark Tibbitts), 1928, "Factors Making for Success or Failure on Parole." Andrew A. Bruce, Albert J. Harno, Ernest W. Burgess and John Landesco, [1928] 1968, *The Workings of the Indeterminate-Sentence Law and the Parole System in Illinois: A Report to the Honorable Hinton G. Clabaugh, chairman, Parole Board of Illinois*. Montclair, N. J.: Patterson Smith, 203-249.
- 1953, "The Aims of the Society for the Study of Social Problems," *Social Problems*, 1: 2-3.
- (ed.) 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』 社会保険出版社.)
- Burgess, Ernest W. and Leonard S. Cottrell, Jr., [1939] 1998, *Predicting Success or Failure in Marriage*, London: Routledge/Thoemmes.
- Burgess, Ernest W. and Harvey J. Locke, [1945] 1953, *The Family: From Institution to Companionship*, 2nd ed., New York: American Book Co.
- Burgess, Ernest W. and Paul Wallin, 1953, *Engagement and Marriage*, Chicago: J. B. Lippincott.
- Burton, Roger V., John W. M. Whiting, Fred I. Greenstein and Orville G. Brim, Jr., 1968, "Socialization," David L. Sills, ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 14, New York: Macmillan, 534-562.
- Christakes, George, 1978, *Albion W. Small*, Boston: Twayne.
- Clarke, Adele E., 1998, *Disciplining Reproduction: Modernity, American Life Sciences, and "the Problems of Sex"*, Berkeley: University of California Press
- 2005, *Situational Analysis: Grounded Theory after Postmodern Turn*, Thousand Oaks: Sage.
- Cole, G. D. H., 1930, "Socialization," Erwin R. A. Seligman, ed., [1930] 1937, *Encyclopaedia of the*

- Social Sciences*, V. 14, London: Macmillan, 221-225.
- Cook, Gary A., 1993, *George Herbert Mead: The Making of a Social Pragmatist*, Urbana: University of Illinois Press.
- Cooley, Charles Horton, 1910, *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, New York: Charles Scribner's Sons. (= 1971, 大橋幸・菊池美代志訳, 『社会組織論』 青木書店.)
- Crane, Richard Teller, 1909, *The Utility of All Kinds of Higher Schooling: An Investigation*, Chicago: H. O. Shepard.
- Croly, Herbert David, 1909, *The Promise of American Life*, New York: MacMillan.
- Denzin, Norman K., 1992, *Symbolic Interactionism and Cultural Studies: The Politics of Interpretation*, Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Dewey, John, 1888, *Psychology*, New York: Harper.
- 1896, "The Reflex Arc Concept in Psychology", *Psychological Review*, 3: 357-370.
- 1915, *School and Society*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1957, 松野安男訳, 『学校と社会』 岩波書店.)
- 1916, *Democracy and Education: An Introduction to the Philosophy of Education*, New York: Macmillan. (= 1975, 松野安男訳, 『民主主義と教育』 上, 下, 岩波書店.)
- Dollard, John, [1935] 1949, *Criteria for the Life History: With Analyses of Six Notable Documents*, Gloucester, Mass.: Smith.
- Ellis, Havelock, 1911, *The Problem of Race-Regeneration*, New York: Moffat, Yard.
- Ellwood, Charles A., 1912, *Sociology in Its Psychological Aspects*, New York: D. Appleton,
- Engels, Friedrich, [1914] 1959, "Grundsätze des Kommunismus," *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz, 363-380, (= 1960, 山辺健太郎訳, 「共産主義の原理」, 大内兵衛・細川嘉六監訳, 1960, 『マルクス＝エンゲルス全集 第4巻 (1846～1848)』, 大月書店, 379-396.)
- Erikson, Kai T., 1966, *Wayward Puritans: A Study in the Sociology of Deviance*, New York: Wiley. (= 2014, 村上直之・岩田強訳, 『あぶれピューリタン——逸脱の社会学』 現代人文社.)
- Fishbein, Morris, and Ernest W. Burgess (eds.), 1947, *Successful Marriage: An Authoritative Guide to Problems Related Marriage from the Beginning of Sexual Attraction to Matrimony and the Successful Rearing of a Family*, Garden City, N.Y.: Doubleday.
- Fisher, Berenice and Anselm Strauss, 1978, "The Chicago Tradition and Social Change: Thomas, Park and Their Successors," *Symbolic Interaction*, 1(2): 5-23.
- , ——— 1979, "George Herbert Mead and the Chicago Tradition of Sociology (Part Two)." *Symbolic Interaction*, 2(2): 9-20.
- Freidson, Eliot, 1975, *Doctoring Together: A Study of Professional Social Control*, New York: Elsevier.
- 1986, *Professional Powers: A Study of the Institutionalization of Formal Knowledge*, Chicago: University of Chicago Press.
- [1970] 1988, *Profession of Medicine: A Study of the Sociology of Applied Knowledge*, Chicago: University of Chicago Press.
- 2001, *Professionalism: The Third Logic*, Chicago: University of Chicago Press.
- [1970] 2007, *Professional Dominance: The Social Structure of Medical Care*, New Brunswick: Transaction. (= 1992, 進藤雄三・宝月誠訳, 『医療と専門家支配』 恒星社厚生閣.)
- Fujimura, Joan H., 1996, *Crafting Science: A Sociohistory of the Quest for the Genetics of Cancer*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Giddings, Franklin Henry, 1897, *The Theory of Socialization: A Syllabus op Sociological Principles*,

- London: Macmillan.
- 1901, *Inductive Sociology: A Syllabus of Methods, Analyses and Classifications, and Provisionally Formulated Laws*, London: Macmillan.
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1965. *Awareness of Dying*. New Brunswick: Aldine. (= 1988, 木下康仁訳, 『「死のアウェアネス理論」と看護——死の認識と終末期ケア』医学書院.)
- , ——— 1967. *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. New Brunswick: Aldine de Gruyter. (= 1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- Gusfield, Joseph R., [1963] 1986, *Symbolic Crusade: Status Politics and the American Temperance Movement*, 2nd Ed., Urbana: University of Illinois Press.
- Harcourt, Bernard E., 2007, *Against Prediction: Profiling, Policing, and Punishing in an Actuarial Age*, Chicago: University of Chicago Press.
- Hobhouse, Leonard T., 1911, *Social Evolution and Political Theory*, New York: Columbia University Press.
- 宝月誠・中野正大編, 1997, 『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣.
- Hughes, Everett C. (ed., intro., David Riesman, Howard S. Becker) [1971] 1984, *The Sociological Eye: Selected Papers*, New Brunswick: Transaction.
- 鎌田大資, 1990, 「H・S・ベッカーの芸術世界論——前衛はいかに約定へとすり変わるか」『ソシオロジ』35(2): 79-95.
- 1991, 「古都税紛争における京都仏教会のリーダーシップと理論化——ストラウスの交渉文脈概念からの整理——」田中滋(研究代表者), 『古都税問題研究—政治と宗教のプロブレマティーク』(科研報告書), 33-55.
- 1998, 「DOING SOCIOLOGY——調査過程でのアブダクションとエビファニー」, 『ソシオロジ』42(3): 143-148.
- 2006, 「バージェスの晩年と終焉——その位置づけの困難さをめぐって」, 中野正大(研究代表者), 『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』(科研報告書), 27-43.
- 2008, 「アメリカ社会学史における量的調査と質的調査——初期シカゴ学派およびアーネスト・W・バージェスの軌跡が照射するもの」『フォーラム現代社会学』7: 113-124. (関西社会学会)
- 2010, 「分水嶺としてのバージェス——家族社会学とシンボリック・インタラクショニズムの交点」『人間関係学研究』8: 17-30. (相山女学園大学)
- 2011, 「アーネスト・バージェスの社会調査におけるケース・スタディと統計の相克——時期区分の試み」『相山女学園大学研究論集』42(社会科学篇): 177-192.
- 2014, 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバーマスとシンボリック・インタラクショニズムの融合」『現代社会学部紀要』8(1): 19-45. (中京大学)
- 2015, 「市民社会, 人権, 公共圏の学としての社会学——英仏市民革命期における二つの思想潮流」『相山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 46: 1-12.
- 2015a, 「コンドルセに由来する二つの遺産——量的, 質的社会調査の発生と展開」『人間関係学研究』13: 51-64. (相山女学園大学)
- 2016, 「形成期のアーネスト・バージェスを解読する——序説」『相山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 47: 1-15.
- 2016a, 「アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解——メソディズム, 労働組合運動, フェビアニズム」『人間関係学研究』14: 49-66. (相山女学園大学)

- 2017,「社会解体論の原点を求めて——原初の社会主義者としてのサン・シモンから初期シカゴ学派が継承したもの」『椋山女学園大学研究論集』（社会科学篇）48: 175-88.
- 鎌田大資・中野正大, 2003-05,「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』51: 23-75, (その2) 52: 73-118, (その3) 53: 93-133. (京都工芸繊維大学工芸学部)
- 金子雅彦, 2012,『医療制度の社会学——日本とイギリスにおける医療提供システム』書肆クラレテ.
- Kluckhohn, Clyde, 1939, "Theoretical Bases for an Empirical Method of Studying the Acquisition of Culture by Individuals," *Man*, 39: 98-105.
- Lannoy, Pierre, 2004, "When Robert E. Park Was (Re)Writing "The City": Biography, the Social Survey, and the Science of Sociology," *American Sociologist*, 35: 34-62.
- Lenin, Vladimir Ilyich (副島種典編訳), 1975,『労働者統制・国有化論』大月書店.
- Marx, Karl and Friedrich Engels, [1848] 1959, "Manifest der Kommunistischen Partei," *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz, 461-493. (= 1960, 村田陽一訳,「共産党宣言」, 大内兵衛・細川嘉六監訳,『マルクス＝エンゲルス全集 第4巻 (1846～1848)』, 大月書店, 473-508.)
- Mathews, Fred H., 1977, *Quest for an American Sociology: Robert E. Park and the Chicago School*, Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Mead, Margaret, [1928] 1961, *Coming of Age in Samoa: A Psychological Study of Primitive Youth for Western Civilization*, New York: Morrow. (= 1976, 畑中幸子・山本真鳥訳,『サモアの思春期』蒼樹書房.)
- Mead, George Herbert (ed., intro., Charles W. Morris), 1934, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店／= 1995, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社.)
- (ed., intro., Mary Jo Deegan), 1999, *Play, School, and Society*. New York: Peter Lang.
- Morley, John, 1874, *On Compromise*, London: Chapman and Hall.
- 中野正大・宝月誠編, 2003,『シカゴ学派の社会学』世界思想社.
- Ohlin, L. E., 1951, *Selection for Parole: A Manual of Parole Prediction*, New York: Russell Sage Foundation. (= 1957, 西村克彦訳,『仮釈放者の選び方——仮釈放予測の手引』法務省保護局 (抄訳).)
- Park, Robert E. 1916, "The City: Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment," *American Journal of Sociology*, 20: 577-612.
- 1931. "The Sociological Methods of William Graham Sumner, and of William I. Thomas and Florian Znaniecki." Stuart A. Rice, ed., *Methods in Social Science: A Case Book*, Chicago: University of Chicago, 154-174.
- (ed., Everett C. Hughes) 1955, *Society: Collective Behavior, News and Opinion, Sociology and Modern Society*, Glencoe, Illinois: Free Press.
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- , ——— (eds.) [1925] 1984, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environments*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1972, 大道安次郎・倉田和四生: 訳『都市——人間生態学コミュニティ論』鹿島出版会.)
- Rose, Arnold M., 1962, *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Boston: Houghton Mifflin
- Ross, Edward Alsworth, 1901, *Social Control: A Survey of the Foundations of Order*, New York:

- Macmillan.
- Simmel, Georg, 1894, "Das Problem der Sociologie," *Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 18: 272-277.
- 1895, "The Problem of Sociology" *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 4: 412-423.
- 1908, *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Leipzig: Duncker & Humblot. (= 1994, 居安正訳, 『社会学』白水社.)
- (trans., Albion Small), 1909, "The Problem of Sociology," *American Journal of Sociology*, 15: 289-320.
- Small, Albion W., 1910, *The Meaning of Social Science*, Chicago: University of Chicago Press.
- 副島種典, 1974, 『社会主義建設の理論と実際』青木書店.
- Strauss, Anselm L., 1945, "A Study of Three Psychological Factors Affecting Choice of Mate," Unpublished Ph.D. dissertation., University of Chicago.
- 1946, "The Influences of Parent-Image upon Marital Choice," *American Sociological Review*, 11: 544-559.
- 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 1978a, *Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 4, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 171-190.
- 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123-139.
- Strauss, Anselm, and Juliet Corbin, [1990] 1998, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, 2nd ed., Beverly Hills, CA.: Sage. (= [1999] 2004, 操華子・森岡崇訳, 『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』2版, 医学書院.)
- Strauss, Anselm, Leonard Schatzman, Rue Bucher, Danuta Ehrlich and Melvin Sabshin, [1964] 1981, *Psychiatric Ideologies and Institutions*. New Brunswick, NJ: Transaction.
- Sumner, William Graham, 1906. *Folkways*. Boston: Ginn. (= 1975, 青柳清隆他訳, 『フォークウェイズ』青木書店.)
- Tivey, Leonard, [1966] 1973, *Nationalization in British Industry*, London: Cape. (= 1980, 遠山嘉博訳, 『イギリス産業の国有化』ミネルヴァ書房.)
- 遠山嘉博, 1973, 『イギリス産業国有化論』ミネルヴァ書房.
- Waller, Willard (intro., Bernard Farber; Foreword, Herman R. Lantz), [1930] 1967, *The Old Love and the New: Divorce & Readjustment*, Carbondale: Southern Illinois University Press.
- Ward, Lester Frank, [1883] 1968, *Dynamic Sociology, or Applied Social Science: As Based upon Statical Sociology and the Less Complex Sciences*, V. 1, 2, New York: Greenwood.
- 1903, *Pure Sociology: A Treatise on the Origin and Spontaneous Development of Society*, New York: Macmillan.
- Wreidt, Ernest A., William J. Bogan and George H. Mead, 1912, *A Report on Vocational Training in Chicago and in Other Cities: An Analysis of the Need for Industrial and Commercial Training in Chicago, and a Study of Present Provisions Therefor in Comparison with Such Provisions in Twenty Nine Other Cities, Together with Recommendations as to the Best Form in Which Such Training May Be Given in the Public School System of Chicago*, Chicago: City Club of Chicago.